三つの充実、その他

目　次

一、　三つの充実
二、　欲と情
三、　人間の三大欲
四、　子孫保存欲
五、　変身
六、　人間の基本的な欲求
七、　最後に辿りつく地点
※　参考文献

三つの充実

三つの充実

それでは、ここで「三つの充実」ということについて、少し考えてみたいと思うが、それは、今日、われわれ人間にとって、一体、どのように生きることが、最も「幸せ」な生き方であるかという問いに対して、誰もが心の底から納得できるようなものとして、ここでは、いわゆる「三つの充実」という考え方を、参考程度に書き留めてみたいと思う。

それは、何も難しいことはないので、いわゆる「仕事、生活、遊び」という、この「三つの充実」を心がけるということである。――つまり、一つは、「仕事」（社会的な活動）を充実させることである。その場合、もちろん、学生であれば、学校の「勉強」ということになるだろうし、また、専業主婦であれば、家事や育児或いは介護、その他を充実させるということである。そして、もちろん、社会人であれば、その人が従事している職業的な「仕事」を充実させるということである。次に、「生活」を充実させるというのは、主に「各人の家庭（家族）生活」を充実させるということであり、そして、もう一つは、「遊び」（趣味や娯楽やレジャーなど）を充実させるということになるかと思う。

それでは、その「三つの充実」について、もう少し詳しく考えてみたいと思うが、われわれ人間というのは、非常に「贅沢な存在」であって、それゆえ、ただ「一つの領域」が満たされただけでは、なかなか満足できにくいところがあり、最終的には、「仕事、生活、遊び」という、この「三つの充実」によってこそ、初めて、自分の「人生」に対して、心の底からの満足感が得られるようなところがあるということである。

例えば、学生の場合であれば、その人が、いくら学校の「勉強」が得意で、優秀な成績を上げていても、それだけでは、なかなか自分の人生に対して、心の底からの満足感は、得られにくいものであり、それに加えて、友だちなどと楽しく遊んだりすることが、必要不可欠であり、そういうことが満たされることによって、初めて心の底からの満足感が得られることになるかと思う。もちろん、その場合、家族との「家庭生活」が、うまくいっていなければ、当然のことながら、そのことが「悩みの種」となり、心の底からの満足感は、なかなか得られにくいものである。また、逆に、家庭生活や友だちとの遊びなどには、十分に満足していても、学校の「勉強」の方が想うようにいかなければ、今度は、そのことが「悩みの種」となり、心の底からの満足感は、なかなか得られにくいものである。

同じように、社会人の場合にも、その人が従事している職業的な「仕事」だけが、いくら充実していても、それだけでは、なかなか「心の底」からの満足感は、得られにくいものであり、それに加えて、同僚や友だち或いは異性との関係などが、うまくいっていて、楽しい時が得られているということが、必要であり、そのようなことが欠落していると、いくら「仕事」だけが充実していても、やはり「心の底」からの満足感は、なかなか得られにくいものである。また、その人の家族や夫婦関係その他に何か大きな悩みや揉め事などがあれば、そのことがどうしても、その人の精神的な「緊張（ストレス）」となって、心の底からの満足感は、なかなか得られにくいものである。そのように、ただ「一つの領域」、或いは、「二つの領域」だけが充実していても、もう「一つの領域」が、想うように満たされないと、どうしても自分の人生に対して、心の底からの満足感は、なかなか得られにくいものである。それだけわれわれ人間というのは、まさに「贅沢な存在」ということになるのだろう。ただ、ここでいう「三つの充実」というのは、むろん、無制限に欲望をむさぼると

いうようなことではなく、その一つ一つの領域を充実させるということである。

それでは、その「三つの充実」という言葉の真意を説明したいと思うが、それは、いわば「物量的な豊かさ」というよりは、むしろ「質量的な豊かさ」ということになるかと思う。それは、一体、どういう「意味合い」かと言えば、それは、次のようになるかと思う。

例えば、この地球上のあらゆる生命体は、何よりも「生きよう」としている存在である。それゆえ、われわれ人間も、当然のことながら、何よりも「生きよう」としている存在である。そして、われわれ人間が、この世で生きていくためには、どうしても必要最低限の「衣食住」というものが、どうしても必要不可欠になって来る。もちろん、遙か遠い大昔であれば、例えば、狩猟や採集、また、農耕や牧畜などによって、いわゆる「自給自足」ということも、あるいは可能であったかも知れないが、今日のような「貨幣経済」においては、その必要最低限の「衣食住」というものを「確保・維持」するためにも、いわゆる「金銭的な収入」というものが、どうしても必要不可欠になって来るということである。

もちろん、その「金銭的な収入」を得るための方法としては、不法（不正）なものをも含めれば、実にいろいろな方法があるかと思うが、その大きな主軸となっているものは、いわゆる「産業活動に従事する」（つまり「仕事に就く」）ということであり、それには、第一次産業（農業、林業、漁業）、第二次産業（鉱業、建設業、製造業）、そして、第三次産業（卸売・小売業、金融・保険業、運輸・通信業、不動産業、電気・ガス・水道・熱供給業、サービス業）、また、公務などがあり、そのいずれかの産業活動か公務活動、その他に従事することによって、いわゆる「収入」を得るという方法である。

つまり、「仕事」というのは、何よりも「収入」を得るための「一つの手段」であり、そのための「労働」ということになるかと思う。もちろん、「収入」などいらないというならば、それは、いわゆる「ボランティア活動」ということであり、その「労働目的」は、前者とは、はっきりと違ったものになるのである。また、もちろん、その人が「資産家」、その他であれば、何も「仕事」などしなくてもよいのかも知れないが、しかし、それ以外の圧倒的多数の人たちにとって、いわゆる「仕事」というのは、何よりも「収入」を得るための「一つの手段」であり、そのためにこそ、たとえつらく厳しい労働であっても、それにじっと耐え忍びながらも、その「労働に従事する」ということになるのである。

とは言え、もちろん、「仕事」というのは、何も「収入」を得るためだけのものではなく、それに加えて、いわゆる「社会的な活動」に従事するということであり、それは、社会の一員として、何らかの「社会的な活動」を行なうということでもあるわけである。

これは、極めて大事な認識であり、「仕事」というのは、いわゆる「趣味や遊び」などのような「個人的な活動」ではなく、まさに「社会的な活動」であり、それゆえ、「趣味や遊び」などであれば、その人が好きな時に好きなことを好きなように行なえば、それでよいものであり、しかも、その「活動や結果」などに対しても、特に「責任を負うということもない」わけである。ところが、「仕事」というのは、「趣味や遊び」などとははっきりと違って、与えられた業務を「誠実に遂行する」ということが、暗黙のうちに要求されているとともに、その「活動や結果」などに対しても、何らかの「責任を負わなければならない」ということであり、その「見返り」として、いわゆる「金銭的な報酬」（つまり収入）が得られるということである。

一、仕事

さて、「仕事」というのは、何よりも「収入」を得るための「一つの手段」であり、そのための「労働」ではあるが、それは、「趣味や遊び」などとははっきりと違っていて、与えられた業務を「誠実に遂行する」ことが、暗黙のうちに要求されているとともに、その「活動や結果」などに対しても、何らかの「責任を負わなければならない」ということである。それは、決して気楽なものではないが、しかし、生きるためには、「金銭的な収入」を得ることが、どうしても必要不可欠であり、その「金銭的な収入」を、まさに「仕事」（つまりは「社会的な活動」）によってこそ、得ているということである。

それでは、どのような「仕事」に従事するのが、いちばんよいのかという問題が生じて来るかと思うが、それは、その人の「資質」に最も適した「仕事」に従事するというのが、まさに「最もよいこと」になるのだろう。もちろん、生きるためには、どのような「仕事」でも従事しなければならないものではあるが、できれば、その人の「資質」に最も適した「仕事」に従事するというのが、まさに「理想」であり、それは、言葉を換えれば、いわゆる「天職」を見つけ出すということにもなるのだろう。

それでは、その「天職」というのは、一体、どういうものかと問えば、それは、その人に最も適した「仕事」であり、それゆえ、その仕事に従事しているような時には、その人自身、まさに「最も充実した時」を過ごしているような状態であるということである。そして、その人の「仕事の内容」とともに、その人の「人生」もより深まっていくようなものである。それゆえ、ただ単に「収入が多い」とか、「カッコいい」というようなことではなく、その人の「資質」に最も適したものであるので、その仕事に従事しているような時には、その人は、まさにその人自身になりきって活動している状態であり、それゆえ、まさに「確かな手応えや充実感」などを全身で感じている状態にもなるわけである。

つまり、その人にとって、確かな手応えが全身にしかと伝わって来るようなもの。その人が、時の経つのを忘れるほど、その活動に深く熱中できるようなもの。その人の心にも身体（からだ）にも熱き「情熱（おもい）」が満ちあふれて来るようなもの。その人が、我を忘れて、その世界に深く「没頭・没入」できるようなもの。その人の「心の中」で大きな位置を占め、「心の主軸」にもなっているようなもの。その人の「夢やロマン」などを強くかき立て、また、深く充たしてくれるようなもの。その人が、多くの時間を降り注（そそ）いで全力で取り組んでも悔いないようなもの。その人が、本来の「自分自身」になりきって思いっきり活動できるようなもの。その他、そのように、その人にとって、「……なるほど、これに従事（専念）しているような時こそは、自分は、最も自分らしく生き生きと躍動して生きている。そして、張りつめた空気と精神とのなかで、確かな手応えと充実感を深く味わい、感じている」。そのようなものこそは、まさにその人にとっての「天職」になるということである。

二、生活

では、次に、「生活」（主に各人の家庭《家族》生活）を充実させるということであるが、その場合、「生活」というのは、基本的には、「家族を中心としたもの」になるかと思う。もちろん、それ以外にも、一人暮らしをはじめ、寮生活、入院生活、老人ホーム、

その他の施設での生活、また、避難生活、ホームレス、その地、実にいろいろな場合があるかと思うが、ここでは、主に「家族生活」について、少し考えてみたいと思う。

まず、「家族」というのは、今日では、「核家族、直系家族、複合家族」というような分類の仕方になっているかと思うが、「核家族」というのは、夫婦とその子供からなるものであり、また、「直系家族」というのは、長男など家系を継ぐ子供の家族に親が同居するというものであり、そして、「複合家族」というのは、それ以外の家族体系ということになるかと思うが、もちろん、そのような分類が大事なのではなく、いかに「生活」を充実させるかということであり、それは、次のようなものになるかと思う。

例えば、一日の「生活」ということを考えてみると、まず、朝起きて顔を洗い、着替えなどをしては、朝食を食べたあと、子供であれば、学校に、大人であれば、職場へと出かけ、そして、専業主婦であれば、家の掃除や洗たくなどを初めとして、ふとん干しや風呂そうじ、また、買い物に出かけたり、あるいは幼い子供やお年寄りなどがいれば、その育児や世話などをしたり、そして、午後には、学校から子供が帰るとともに、夕方（或いは夜）には、父親も家に帰ってきて、テレビなどを観ながら、多くは一緒に夕食を取ることになるかと思うが、その時が、いわば「一家団らん」の時になるというのが、ふつう一般的な「家庭での生活」ではないかと思う。

例えば、それが核家族であれ、拡大家族（直系家族や複合家族）、あるいは寮などでの生活であれ、その他、何であれ、とにかく、そこで一緒に生活する人たちの間がうまくいっていることが、何よりも「幸せ」なことであるので、まず、そのことを第一に心がけることになるかと思う。むろん、ある程度の物質的（金銭的）充実というものも、当然、必要にはなって来るだろうが、しかし、何よりも一緒に生活する人たちが親密であることが、何よりも「幸せ」なことであり、それが欠落しては、何一つ楽しいことはなく、ただただお互い「不平・不満や恨み或いは憎しみ」などを意味なくぶつけ合うことになってしまうことも多く、それゆえ、まず第一に、一緒に生活する人たちの「意思疎通」（心のコミュニケーション）を図ることが、何よりも大事なことになって来るかと思う。

次に、やはり「健康」に留意することも非常に大事なことであり、例えば、「生活習慣病」というものがあるが、そのような「病気」になるのも、結局は、その人自身の「責任」であることが多いとともに、重い「病気」などを患っては、それこそ、何ひとつ充実させることも出来にくくなるわけである。それゆえ、日頃から何らかの「運動やスポーツ」などを行なって、自分の「健康管理」を行なうこともやはり大事なことになるのだろう。それらに加えて、テレビをはじめ、ビデオ（ＤＶＤ）、書物、雑誌、オーディオ、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、ゲーム、園芸、その他、そういうものを心から楽しむというように、各人それぞれの「家族生活」（あるいは寮生活や独り暮らしその他など）を、その人なりに充実させることになるかと思う。

三、遊び

それでは、最後に、「遊び」（趣味や娯楽やレジャーなど）を充実させるということであるが、それは、もう言うまでもなく、その人が、まさに「好きな時に好きなことを好きなように思いっきり遊び楽しめば、それでよいこと」であり、それ以外のことは、すべて

余計なことになるかと思う。が、敢えて、それに加えて、ただ単に飽くなき欲望を盲目的に「むさぼる」ということではなくて、むしろ、その「一つ一つ」をじっくりと「深く味わう」ということについて、少し話をしてみたいと思う。

それは、一体、どういうことかと言えば、例えば、テーブルの上に数多くの料理があるとして、それをできるだけ数多くの「品と量」とを口の中にどんどんかっこみ、そして、食った食ったと満足しているような状態と、その「一品一品」をじっくりと深く「味ひ分け」ながら、その食事を心から楽しむのとでは、やはり違ってくるだろう。――例えば、他人よりも少しでも数多くの「映画」を観たのだから、それだけ自分のほうが幸せだというような問題ではなく、その一つ一つの「映画」をほんとうに心の底から深く「味わえて」いるのかどうか。つまり、ただ単に表面的な「内容」（ストーリー）を楽しんでいるだけなのか。それとも、もっとその「映画」の本質的な部分まで深く厳密に見極めながら、「なるほど、ほんとうに素晴らしい！」と、心の底から深く「味わえて」いるのかどうか？

それは、文学、音楽、絵画、演劇などをはじめ、新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、漫画、アニメ、ＣＤ、ＤＶＤ、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、ゲーム、また、将棋、囲碁、釣り、手芸、旅行（ドライブ）、あるいは様々なスポーツ、園芸、その他、何であれ、自ら行なう場合でも、或いは、他人が行なっているのを見聞きするような場合であれ、とにかく、この世にある実に様々な対象の、その一つ一つをできるだけ深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」ようにすることによって、その対象の「本質的な部分」（或いは「根源的な部分」）などが見えて来るということであり、そして、その対象の「本質的な部分」（或いは「根源的な部分」）などと深く交わって、楽しむ。或いはまた、深く溶け合って、喜ぶ。それが、いわゆる「人生の深み」でもあり、そのようなことの「積み重ね」によってこそ、より深い「充実感や満足感」などが得られるようになるということである。

むろん、人によっては、何もできるだけ深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」などという面倒なことなどはせずに、その人のまさに「見たまま、聞いたまま、嗅いだまま、味わったまま、感じたまま」に心から楽しめば、それでもう十分ではないかと反論する人も非常に多いかと思う。確かに、そのように「気楽に楽しむ」ということも、非常に大事なことであり、あるいは、それでもう十分なのかも知れない。しかし、例えば、野球などの中継を観ていても、その一つ一つのプレーの細かなところまで十分に理解できているのと、そういう細かなことは、何も分からずに、ただ単に「投げた、打った、走った、捕った、勝った、負けた」というように「表面的な現象」だけしか理解できていないのとでは、たとえ同じようにその試合を「心の底から楽しんだ」といっても、その「味わいの深さ」というものは、全く「全然違ったもの」になるだろう。そのように、この世にある実に様々な対象の、その一つ一つの対象を、どのくらい深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」ことができ得るかに応じて、その人の「人生」も、より深まっていくことになるのである。

＊　　＊

それでは、もう一度、なぜ、「三つの充実」というものがどうしても必要不可欠になるのかと問えば、それには、次のような非常にはっきりとした理由があるからである。つまり、――例えば、「仕事」（社会的な活動）などがどれほどうまくいっていても、それを

以って、「生活」（主に各人の家庭《家族》生活）の「穴埋め」には「決してならない」ということである。それは、一体、どういうことかと問えば、それは、次のようなことであり、例えば、「仕事」（社会的な活動）の充実から得られる「喜び」と、「生活」（主に各人の家庭《家族》生活）の充実から得られる「喜び」と、そして、「遊び」（趣味や娯楽やレジャーなど）の充実から得られる「喜び」とは、その一つ一つは、全く全然「別の喜び」になるからである。――つまり、「仕事」（社会的な活動）から得られる「喜び」とその「志向」は、まさに「手応え」志向であり、また、「生活」（主に各人の家庭《家族》生活）から得られる「喜び」とその「志向」は、まさに「幸せ」志向であり、そして、「遊び」（趣味や娯楽やレジャーなど）の充実から得られる「喜び」とその「志向」は、まさに「楽しさ」志向であり、それゆえ、その一つ一つの「喜びと志向」は、全く全然「別の喜びと志向」になるのである。それゆえ、一方が一方の「穴埋め」には「決してならない」ということが、最も「大事な認識」になるのである。だからこそ、まさに「三つの充実」というものがどうしても必要不可欠になるという結論になるのである。

以上、われわれ人間にとって、一体、どういう人生であれば、より「幸せ」であるのかという問題については、いわゆる「三つの充実」（それは「仕事、生活、遊び」）という、この「三つの充実」を心がけるようにすることによって、より深い「充実感や満足感」などが得られるようになるということである。

＊　＊

欲と情

例えば、われわれ人間は、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされているものであるが、そのなかの「欲」としては、例えば、「……食欲、性欲、物欲、金銭欲、所有欲、支配欲、独占欲、出世（社会的地位）欲、名誉欲、名声欲、その他」、実に様々なものがあるかと思う。それでは、その「欲」というのは、一体、何なのかと問えば、それは、大きく二つに分かれ、一つは、生きていく上で、どうしても「必要不可欠なもの」として欲するようなものである場合と、もう一つは、いわば「蓄えや豊かさ或いは楽しみ、その他」のために欲するような場合とがあるかと思う。そして、最初の生きていく上でどうしても「必要不可欠なもの」として欲するようなものである場合は、それがなければ、いわば「生きてはいけない」ということであり、それゆえ、その「欲」というものは、まさに「個体維持」（つまり「生存欲」）から生じて来る「欲求」ということになるかと思う。

例えば、動物たちの「欲」（欲求）というのは、基本的には、すべて「個体維持」と「子孫保存欲」から生じて来るものであり、それゆえ、われわれ人間のように「蓄えや豊かさ或いは楽しみ、その他」のために欲するというような場合は、たとえあったとしても、それは、極めて「限られたもの」になるということである。一方、われわれ人間というのは、もちろん、同じ「動物」であるので、ほかの動物たちとまったく同じように、いわゆる「個体維持」と「子孫保存欲」という「二大本能」は、当然のことながら、しっかりと持ち合わせているわけだが、それに加えて、「蓄えや豊かさ或いは楽しみ、その他」のために「欲する」というような場合も、また、しっかりとあるということである。そして、前者が、「第一欲求」としての「動物的欲求」であるとすれば、後者は、「人間的欲求」としての、いわば「第二欲求」以上ということになるのである。

一、欲

それでは、「欲」の問題というのは、一体、何が「問題」なのかと問えば、それは、次のようなことである。例えば、お金がほしいと思う。それ自体には、何の問題もない。また、巨万の富がほしいと思う。それ自体にも、何の問題もない。それでは、一体、何が「問題」なのかと問えば、それは、その「お金」を手に入れる「手段の方法」にこそ、様々な「問題」が生じて来るということである。それは、一体、どういうことかと言えば、それは、お金を「正当な手段で手に入れた場合」には、ふつう問題はなく、逆に、お金を「不正な手段で手に入れた場合」にこそ、様々な「問題」が生じて来るということである。

同じように、例えば、「性欲」を満たしたいと思う。それ自体には、何の問題もない。また、できるだけ数多くの異性と「恋愛体験」を持ちたいと思う。それ自体にも、ふつう問題はない。それでは、一体、何が「問題」なのかと問えば、それは、「性欲」を「正当な手段」（例えば同意その他）などで満たす場合には、ふつうであれば、問題はなく、逆に、「性欲」を「不正な手段」（例えば強制その他）などで満たそうとする場合にこそ、様々な「問題」が生じて来るということである。

つまり、「欲」から生じる「悪」の問題というのは、結局は、様々な「欲」を満たす時のその「手段の方法」によって、様々な「問題」が生じて来るということである。つまり、

それがたとえどのような「欲」であっても、いわゆる「正当な手段で手に入れた場合」であれば、基本的には、これという「問題」はなく、逆に、いわゆる「不正な手段で手に入れた場合」にこそ、様々な「問題」が生じて来るということである。そして、その「不正な手段」（或いは「不正な行為」）としては、大きく「三つぐらい」に分類でき、その一つは、いわゆる「法」（法律）などに触れるような「不正的な行為」であり、そのような「不正的な行為」に対しては、何らかの「罰則」（例えば「刑罰」）などが課せられることになる。一つは、何らかの「組織や団体」（例えば、会社、学校、その他）などに所属していて、その「組織や団体」（例えば、会社、学校、その他）などの「規則」その他に明らかに反するような「不正的な行為」をした時に、その「組織や団体」などから、何らかの「罰則」その他を受けるような場合であり、そして、もう一つは、いわゆる「慣習的規範」（例えば、冠婚葬祭、その他のマナー）などに明らかに反するような言動、あるいは、われわれ人間の「道徳観・倫理観」などに明らかに反するような「不正的な行為」などに対しては、何らかの「批判や非難」などを浴びることになるということである。

二、欲そのもの

それでは、「欲」そのものというのは、一体、どういうものであるかと問えば、それは、まさに「むさぼる」ということであり、その「むさぼる」というのは、何がなんでも手に入れたいという「欲求」でもあり、それゆえ、まさに「いかなる手段も辞さない」ということにもなりやすく、そこからこそ、様々な「不正的な行為」が生じやすくなるということである。例えば、お金が欲しいと思う。それ自体には、何の問題もないが、何がなんでも「お金」を手に入れたいという「欲求」が強くなり過ぎると、まさに「いかなる手段も辞さない」ということにもなりやすく、そこからこそ、まさに「……強盗、窃盗、詐欺、恐喝、ひったくり、万引、その他」などが生じやすくなるということである。また、「性欲」を満たしたいと思う。それ自体には、何の問題もないが、何がなんでも「性欲」を満たしたいという「欲求」が強くなり過ぎると、まさに「いかなる手段も辞さない」ということにもなりやすく、そこからこそ、まさに「……痴漢、強制わいせつ、強姦（輪姦）、子供への性的虐待、その他」などが生じやすくなるということである。また、権力や社会的地位などがほしいと思う。それ自体には、何の問題もないが、何がなんでも「権力や社会的地位」などを得ようとする「欲求」が強くなり過ぎると、まさに「いかなる手段も辞さない」ということにもなりやすく、そこからこそ、まさに「実に様々な策略や陰謀あるいは不正的な行為」その他などが生じやすくなるということである。

三、情

一方、「情」としては、例えば、「快・不快、怒り、恐れ、嫌悪、嫉妬、驚き、喜怒哀楽、愛情、苦しみ、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」、実に様々なものがあるかと思うが、それでは、「情」の問題としては、一体、何が「問題」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、上述のような「情（感情）」（特に一（マイナス）の感情）などに振りまわされて、自分自身を見失うようなところに、様々な「問題」が生じて来ると

いうことである。例えば、ある人に「恨みの感情」を抱いたとする。それ自体には、何の問題もない。なぜならば、その人が「頭の中」（或いは「心の中」）で何を思い、どのような「感情」を抱こうが、それは、その人の全くの「自由」だからである。ただ、「問題」なのは、その「恨みの感情」にかられて、何らかの「不正的な行為」を実際に行なうところに、様々な「問題」が生じて来るということである。そして、その最悪の「ケース」としては、例えば、相手に様々な「暴力」（暴行）などを振ったり、或いは、相手を殺傷したりして、いわゆる「犯罪的な行為」にまでなってしまうということである。

四、結び

つまり、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）では、実に様々な生々しい「欲望や感情」などが、絶えず現われたり消えたりしている状態であるが、もちろん、それがそのまま外に現われるのではなく、ふつうであれば、その人の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）によって自然とコントロールされて、いわば「人間らしい言動」になって外に現われて来るということである。逆に言えば、その人の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）による「支配」（コントロール）が弱まれば弱まるほど、それだけその人の生々しい「欲望や感情」などは、そのまま外に現われやすくなるということである。それは、とくに酒に酔っているような時には、そのような傾向がより強くなるかと思うが、それは、言うまでもなく、その人の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）による「支配」（コントロール）が弱まり、それに代わって、その人の「欲望的部分」や「気概（激情）的部分」などが、その生々しい「鎌首（かまくび）」を持ち上げるようになるからである。

つまり、われわれ人間というのは、ふだんは「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）によって強く支配されていて、様々な「欲望や感情」などは、それなりにコントロールされている状態であるが、何か問題を起こすその瞬間は、その人の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）による支配よりも、その時の「欲望や感情」などのほうが勝（まさ）ってしまい、結果として、様々な「問題」を起こしてしまうということである。逆に言えば、その人の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）によってしっかりとコントロールされていれば、様々な「不正的な行為」は、それだけ起こりにくくなるということである。それゆえ、様々な生々しい「欲望や感情」などに振りまわされているような時こそは、まさにありとあらゆる「不正的な行為」などが生じやすくなる、まさに「源泉」そのものになるということである。

＊　＊

人間の三大欲

人間の三大欲

例えば、動物の「三大欲」というのは、一体、何かと敢えて問えば、それは、まさに「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」であり、それ以外は、全く考えられない。そして、われわれ人間も基本的には全く「同じ動物」であるので、それゆえ、われわれ人間の「三大欲」も、当然のことながら、まさに「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」になるというのが、今日までの一般的な「考え方」ではなかったかと思う。もちろん、それは、それで正しい「考え方」ではあるが、それでは、なぜ、われわれ人間の「三大欲」というものを、いわゆる「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」ではなくて、敢えて、それを「食欲」と「性欲」それに「物欲」（金銭欲）というようなことにしたのかと言えば、それには、次のような非常にはっきりとした理由があるからである。

一、食欲

例えば、われわれ人間の「食欲」というのは、ほかの動物たちのように、目の前にある「食べ物」をただ黙って食べているというよりは、むしろ、今日はあれが食べたい、或いは、こういうものが食べたい、その他、実に様々な「思いや考え」などが生じて来るものであり、そのために、様々な食材を買い求めては、それらに色々な「味付け」で調理をして、より食べやすく、また、より美味しくして食べようとしているものである。それに加えて、世界中にある実に多種多彩な「料理」なども、できるなら食べてみたいというような欲求とともに、同じ料理でも、より美味しいものを愛し求めるというような、そういう非常にはっきりとした意欲的な「欲求」を持っているということである。

それでは、その「食欲」というものを幾つかに分類してみると、一つは、「生きんがための食欲」であり、それは、まさに「個体維持」（或いは「生存欲」）としての「食欲」であり、この点においては、「動物」も「人間」も全く同じであり、何一つ異なるところはないのであり、そして、これこそは、まさに「本能」そのものの「食欲」である。

一方、われわれ人間の場合には、それだけではなく、どうせ食べるならば、より「美味しいもの」が食べたいという「強い欲求」があり、そして、この「欲求」こそは、ほかの「動物」たちとははっきりと違う、まさに「人間的な欲求」の一つであり、もちろん、ほかの「動物」たちにも、いわゆる「まずいものや嫌いなものよりはうまいものや好きな方を選んで食べる」というような「基本的な欲求」は、当然あるだろうが、しかし、われわれ人間のように、今日はあれが食べたい、或いは、こういうものが食べたい、その他、実に様々な「思いや考え」などが生じて来て、そのために、様々な食材を買い求めては、それらに色々な「味付け」で調理をして、より食べやすく、また、より美味しくして食べようとしている「動物」などはどこにもいないのである。なぜならば、それらは、「本能」そのものの「食欲」（つまり「大脳辺縁系」の「食欲」）だけではなく、それらにわれわれ人間のまさに「理知的部分」（つまり「知性＋理性＋母体のようなもの」）がつけ加わった、まさに実に多種多彩な「欲求」になっているからである。それは、「美味しい料理」だけではなく、例えば、「健康によい料理」とか、「美容によい料理」とか、或いは、「長生きの出来る料理」とか、その他、その「欲求」はどこまでも拡大していくものである。

ところで、女性たちは、比較的頻繁に何かを食べたり飲んだりしていますが、それは、むろん、空腹を満たすための行為であるとともに、それに加えて、もう一つは、その場の「緊張感」や「ストレス」その他などの解消のための行為でもあるということである。

そのいちばん良い例は、次のようなものである。つまり、女性たちは、何よりも「甘いもの」（つまり「スイーツ」）が大好きであり、それゆえ、よく「甘いものは別腹」と言って、好んで食べていますが、その理由の一つとしては、甘いものは、ふつう高カロリーであり、その高カロリーの炭水化物は、体の中に摂取されると、まさに「皮下脂肪」に変わって、それがまさに「太る理由」でもあるが、それとともに、その「皮下脂肪」が、実は「女性らしい肉体」を作っているとともに、その「皮下脂肪」の中にこそ、女性にとっては不可欠な「女性ホルモン」が蓄えれ、それゆえ、その「皮下脂肪」が不足すれば、当然、「女性ホルモン」を十分に蓄えられず、女性としての「体系や機能」などが十分に維持できなくなってしまうのである。だからこそ、女性たちはどうしても「甘いもの」がほしくなるのである。そして、もう一つの理由は、「甘いもの」（つまり「スイーツ」）というのは、何よりもいちばん簡単かついちばん確実に「脳に満足感」（或いは「心に満足感」）が得られるものであり、それゆえ、いわゆる「甘いもの」（つまり「スイーツ」）を食べるという行為は、本人たちもそれとは気づかないままに、男性をも含めて、いわば「疲労回復」や「欲求不満」或いは「ストレス解消」などの最も手っ取り早いかつ最も確実な方法の一つになっているということである。

二、性欲

さて、次は「性欲」であるが、それを大きく三つに分けてみると、その一つは、「愛情欲」であり、一つは、まさに「セックス欲」であり、そして、もう一つは、いわゆる「子孫保存欲」になるかと思う。それでは、まず最初に、「愛情欲」から考えてみたいと思うが、それは、次のようなことである。――つまり、われわれ「人間」だけではなく、ほかの「動物」たち（例えば「鳥類や哺乳類」など）をも含めて、この世に誕生した「ひなや赤ちゃん」などが何よりも最初に求めるものは、一体、何かと敢えて問えば、それは、一つは、まさに「食べ物」（つまり「えさか母乳か」）であり、それが想うに得られなければ、やがて「餓死」するしかない。そして、もう一つは、やはり「親の愛情」であり、親がせっせとエサを運んで来たり母乳などを与えてくれる「愛情」によってこそ、初めて、その「ひなや赤ちゃん」などは生きることができ得るのである。それゆえ、この「二つ」（「食欲」と「愛情欲」）というのは、文字通り、まさに「本能的欲求」そのものである。

そして、人間の場合、その「愛情欲」というのは、どんどん拡がりを見せて、最初は、最も身近な「家族」（両親や兄弟（姉妹）、祖父母、その他）などの「愛情」を求めるものであるが、やがて、「近隣社会」での近隣の人たちとの「人間関係」（そこでの人間らしい愛情を求める）、また、保育園や保育所或いは幼稚園などでの保育士や先生或いは園児たちとの「人間関係」（そこでの人間らしい愛情を求める）、そして、小学校や塾や習い事或いは部活などでは、先生や監督・コーチ或いは生徒その他との「人間関係」（そこでの人間らしい愛情を求める）、さらに、「中・高時代」に入れば、今度は、第二次性徴とともに、自我がはっきりと目覚めることによって、まさに「異性への関心」も高まり、

その異性との「恋愛欲」（愛情欲）などもはっきりと生じて来るというように、われわれ人間の「愛情欲」というのは、どこまでも拡大していくものである。

次は、「性欲」の中のまさに「セックス欲」（或いは「交尾欲」）であるが、それは、われわれ人間以外の、ほかの動物たちの「性欲」というのは、そのほとんどが、いわゆる「子孫保存欲」のためのものであるが、われわれ人間の「性欲」というのは、そのような「子孫保存欲」のためだけではなく、実に多岐に渡っているものであり、例えば、今日は、こういうアダルト雑誌やビデオ或いはＤＶＤやアダルトサイト、その他、そういうものを観てみたいとか、また、誰々が好きだとか嫌いだとか、つき合いとか、デートしたいとか、あるいはこういう「セックス」がしてみたいとか、その他、実に様々な「思いや考え」などが生じて来るとともに、いろいろな人との「恋愛や性交渉」その他なども楽しみたいというような、非常にはっきりとした意欲的な「欲求」を持っているということである。

三、睡眠欲

ところが、「睡眠欲」というのは、例えば、用をもよおして、仕方なくトイレに行くようなところがあり、そこには、これという「選択の余地」などあまりなく、いわゆる「睡魔」に襲われた時には、その「睡魔」にただただ身をまかせるしかないものである。それは、いわゆる「欲」というよりは、遙かに「生理的欲求」であり、もちろん、「食欲」も「性欲」も同じように、まさに「生理的欲求」ではあるが、ただ、「睡眠欲」や「休息欲」というのは、自分の身体（からだ）をひたすら休ませたいというだけの「欲」（欲求）であり、それは、いわば「植物的欲求」であり、一方、いわゆる「食欲」や「性欲」というのは、いろいろなものをどこまでも貪欲にむさぼりたいという、まさに他に向かっての意欲的な「欲」（欲求）であり、それは、むしろ「動物的欲求」であるということである。

ちなみに、疲れて来ると、なぜか「性欲」が生じて来るという話があるが、それは、「疲れ」（或いは「酒酔い」なども同じであるが）、いわゆる「知性や理性」などの支配（コントロール）が弱まって来ると、いろいろたまっている「ストレス」や「欲求不満」などを本能である「食欲」や「性欲」（或いは「自慰行為」）などで解消しようという「本能的な働き」が、本人の意志とはあまり関係なく、自然と生じて来るということである。

四、「物欲」（金銭欲）

最後に、「物欲」（金銭欲）であるが、前述のように、「睡眠欲」や「休息欲」というのは、自分の身体（からだ）をひたすら休ませたいというだけの「欲」（欲求）であり、それは、いわば「植物的な欲求」であり、一方、いわゆる「食欲」や「性欲」というのは、いろいろなものをどこまでも貪欲にむさぼりたいという、まさに他に向かっての意欲的な「欲」（欲求）であり、それは、むしろ「動物的な欲求」である。そして、われわれ人間にとって、そのような傾向がより強いのは、いわゆる「睡眠欲」よりは、むしろ遙かに「物欲」（金銭欲）の方であり、そして、その「物欲」（金銭欲）というのは、まさに実にいろいろなものやできるだけ多くのもの（或いは「お金」）などを、どこまでも貪欲にむさぼりたいという非常にはっきりとした意欲的な「欲」（欲求）になるということである。

例えば、生活が非常に苦しい時には、買いたいものも想うように買えず、また、したいことも想うようにできないような生活状況かと思うが、やがて、その人が金持ち（或いは「大金持ち」）になった時に、その人が最初にすることは、一体、何かと敢えて問えば、それは、一言で言えば、買いたくても買えなかったようなものを買いまくり、また、したくてもできなかったようなことを好んでするようになるということであり、例えば、高級なマンションやマイホームなどを購入し、様々な豪華な室内装飾や家電類などを買い揃え、車なども高級車や外車、また、高級な衣服類をはじめ、家具類や寝具類、また、カバン・バッグ・時計・アクセサリー類、その他なども、有名なブランド品などで買い揃え、ジムやエステ或いは高級レストランや高級店などに通い、そして、海外旅行などにも頻繁に出かけるというように、われわれ人間の「物欲」（金銭欲）というのは、どこまでも行っても際限のないものであり、そのためには、何が何でも「お金」というものが必要不可欠であり、それゆえ、われわれ人間というのは、お金、お金とお金をまるで「神様」のように崇めて、お金のためなら、どんなことでもやりかねない、或いは、どんなことでも喜んでするというような、それほどまでの意欲的な「欲」（欲求）であるということである。

それに加えて、「物欲」（金銭欲）というのは、ほかの動物たちには、基本的にはなく、われわれ人間に至って、初めて生じて来た「欲」（欲求）であり、それゆえ、動物の「三大欲」（人間も含む）というのは、まさに「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」であるが、一方、われわれ人間の「三大欲」というのは、むしろ「食欲」と「性欲」それに「物欲」（金銭欲）とした方が、遙かにわれわれ人間の「実情」に合ったものになるということである。

＊　　＊

種族保存欲

種族保存欲

例えば、この地球上のありとあらゆる動植物は、何よりも「子孫を残す」ことを最優先させている。もちろん、「個体維持」も大事なことではあるが、それ以上に最優先させているものは、まさに「子孫を残す」ことであり、しかも、より強い「子孫」を残すような「仕組み」になっている。――例えば、動物界では、オス同士が闘い、必ず、勝ったオスとメスとが交尾をして、より強い「子孫」を残すような「大原則」ができている。また、サケなども広い海から生まれ故郷の川へと遡上して、より強い「子孫」を残すような「仕組み」になっている。また、鳥たちの渡りの理由も、一つは、エサのためと、もう一つは、繁殖のためであるが、渡りをするためには、どうしても強い生命力が必要であり、また、鳥の「求愛行動」なども、結局は、生命力の「力強さ」が要求されるものであり、すべては強い「子孫」を残すための「仕組み」であり、そして、そのような「仕組み」を創り出しているものこそは、まさに「遺伝子」ということである。

一方、われわれ人間は、何よりも「自分が大事」であるという意識を持ち合わせているかと思うが、それでも、例えば、親たちは、自分の「子供や孫たち」のためなら、自分を犠牲にしてもよいという意識が自然と生じてくるということである。それは、一見、われわれ人間の「理知的部分」（知性や理性など）がそう考えて行動しているように思えるが、実はそうではなく、本当のことを言えば、われわれ人間をも含めたこの地球上のありとあらゆる「生命体」は、いわゆる子孫を残すことを何よりも最優先させるような「遺伝子の働き」を根底から受けているということである。それは、この地球上に生命が誕生したのは、約四十億年ぐらい前であるが、その生命が様々な進化を遂げながら今日まで永々と生き長らえて、今日でもなお地球上にこれほどまでの「生命体」が生存し続けている「最大の理由」は何かと敢えて問えば、それは、われわれ人間を含めたこの地球上のありとあらゆる「生命体」は、まさに子孫を残すことを何よりも最優先させるような「遺伝子の働き」を根底から受け続けているからである。そして、それは、そのまま自分の「遺伝子」（子孫）をできるだけ多く残そうとしている「遺伝子自身の働き」に他ならず、それは、一般的には、いわゆる「本能」（今日的には「利己的遺伝子」）と呼ばれているものである。

例えば、動物たちは、ことさらに交尾そのものがしたくて交尾をしているというよりは、むしろ遺伝子（本能）から「交尾をしろとつき動かされて交尾をしている」ということである。また、われわれ人間も、自分の意志であれこれセックスしているように思いがちであるが、もちろん、そういう一面は確かにあるが、しかし、自分自身にも自覚できない最も根源的には、むしろ絶えず遺伝子（本能）からセックスをしろセックスをしろとつき動かされてセックスをしているということである。それは、例えば、異性への性的な「興味や関心」などは、死ぬまで途絶えることはなく、また、異性のちょっとした性的（セクシー）な「姿や仕草（しぐさ）（言動）」などにも、すぐに「性衝動」が生じるような「仕組み」が、すでにでき上がっているということである。――つまり、動物の場合であれば、繁殖期が来れば、必ず本能的（衝動的）に「繁殖行動」へと向かっていくものであるが、一方、人間の場合には、動物ほど直接的ではなく、いわゆる「性衝動」がはっきりと生じることによってこそ、初めて「セックスができる」という「仕組み」（大脳辺縁系）になっていて、逆に、「性衝動」が生じなければ、セックスはできないということである。それをもっと具体的に言えば、

特に男性の場合、何らかの「性的刺激」を受けることによって、初めて「性欲」が生じるとともに、そのはっきりとした「性欲」（勃起）によってこそ、初めて、セックスが「可能になる」ということである。そして、そのような「性欲」を生じせしめているものは、もちろん、「仕組み」としては「大脳辺縁系」であるが、しかし、そのような「仕組み」を創り出したのは、まさに「遺伝子の働き」であり、「性欲」（「性衝動」）そのものは、そのまま「本能」（つまり「遺伝子の働き」）に他ならないのである。

つまり、われわれ人間が「セックス」をするのは、自分の「理知的部分」の働きで行なっていると思っている人は非常に多いかと思うが、むろん、そういう一面は確かにあるが、しかし、われわれ人間の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）は、あれこれ「セックスのことを考える」ことはでき得ても、もともと「性衝動」そのものはないのであり、それゆえ、われわれ人間の「理知的部分」の働きだけでは、セックスはでき得ず、それにはっきりとした「性衝動」が加わることによって、初めて「セックスが可能になる」とともに、そのような「仕組み」を創り出しているのは、まさに「遺伝子の働き」であるということである。――それでは、なぜ、われわれ人間は、ほかの動物たちとは違って、そのような「仕組み」になっているのかと問えば、それは、もともとからあった「古い皮質」（つまり「大脳辺縁系」《食欲や性欲その他の本能を生み出している部分》）に加えて、動物から人間への進化の過程で、いわゆる「新しい皮質」（特に「前頭前野」《いわば「理知的部分」》）が覆いかぶさるように大きく発達することによって、いわゆる「本能」をある程度コントロールでき得るような「仕組み」となり、その結果として、われわれ人間にとっても、もちろん、「食欲」や「性欲」という、この「二大本能」は、ほかの動物たちと全く同じように、最も「根源的なもの」であることに変わりはないが、その一方で、われわれ人間というのは、「新しい皮質」（特に「前頭前野」《いわば「理知的部分」》）の著しい発達によって、今日のようなかなり高度な「文化や文明」などを築き上げることを可能にして来たということでもあるのです。

＊　＊

変身

「変身」について

例えば、『変身』というカフカの有名な作品があるが、それは、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していたという話である。もちろん、そのようなことは、現実には起こりようのないことではあるが、しかし、自分の「姿・形（すがたかたち）」が、ある日、突然、いわゆる「変身」するというようなことは、現実にはいくらでもあり得ることである。それは、いったいどういうことかと言えば、それは、次のようなことである。

例えば、ある日、交通事故に遭ったとする。しかも、それは、極めて深刻な交通事故であり、それゆえ、交通事故に遭った瞬間から、その人の意識は、まさに意識不明状態になってしまったとともに、生死にも直接かかわるような極めて深刻な傷を負ってしまったとする。その場合、通常、誰かの通報によって救急車が呼ばれ、その救急車に乗せられ病院に運ばれては、すぐにも「大手術」が何時間もかけて行なわれることになるかと思う。そして、その人が麻酔から覚めて、意識が戻った時には、その人は、まさにベットの上で寝ているような状態になるわけである。そして、自分が交通事故に遭ったことを想い出しては、それでは、自分の体は、いったいどうなったのかが気になり始め、そこで、どうなったのかを尋ねた時に、家族の誰かから、実は、これこれこういう事情で、一方の脚を切断しなければならなかったことや、実は、脊髄が損傷していて、歩けないので、これからは、車いす生活をしなければならないと告げられたとする。それは、その人にとっては、極めて「大きなショック」であり、それゆえ、最初は、うそだろうという感じで、到底受け入れ難い気持ちにもなるかと思う。

それは、カフカの『変身』という作品の、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していたという話と、どこか共通するところがあり、それは、自分の「体」が、突然、良い方向ではなく、むしろ悪い方向へと「変身」してしまったということである。しかも、ここで最も大事なことは、例えば、化粧（メイク）や服装（ファッション）、その他などで自分をイメージチェンジして変えるのも、確かに「変身」ではあるが、しかし、そのような「変身」は、いつでも「元の状態」に戻れる変身であり、一方の、カフカの「変身」のように、二度と元に戻れない「変身」とは、根本的に違うものである。それに加えて、その人の「心」が「変心（変わった）」わけではなく、むしろその人の「体」が、「変身（変わって）」しまったということである。そして、その人の「体」が、悪い方向へと「変身」することによって、家族はともあれ、他人のその人を見る目も、大きく変化しやすいということである。つまり、自分の「心」そのものは、何も変わっていなくても、自分の「体」（つまり「姿・形（すがたかたち）」）が、悪い方向へと「変身（変わって）」しまっただけで、他人の自分を見る目が、大きく変化しやすいということである。

一、家族の目

まず、家族の問題から考えてみたいと思うが、家族にしてみれば、命が助かったということで、よかった、よかったということになるかと思う。もちろん、その気持ちにうそはないだろう。そして、入院生活も終わり、家に戻ってきて、今までと同じような生活を始めることになるかと思うが、しかし、今までと何から何まですべて同じということにはな

らないだろう。それでは、いったい何がどう変わるというのだろうか？　それは、まず、本人自身の気持ちの「変化」が生じ、そして、もう一つは、家族の気持ちの「変化」も生じて来るということである。そして、本人自身の気持ちの「変化」としては、当然のことながら、最初の頃は、どうしても事実を事実として受け入れ難く、それゆえ、荒れた気持ちにもなり、時には、家族にやつ当たりをしてみたりとか、また、時には、自分の部屋に閉じ籠もって絶望的な気持ちになったりするかと思うが、しかし、やがては事実は事実として受け入れざるを得ず、その結果として、前向きに生きていくことを考えるようになるということである。

一方、家族としては、そのように心を悩ましている姿を見ることは、非常につらいことであるとともに、できるだけ今まで通り自然体でサポートしていきたいと思うわけである。もちろん、それは、その時だけのことではなく、何年も何十年にも渡って、楽しい時もつらい時もあるかも知れないが、とにかく継続して行なうようになっていくということである。それは、祖父母を初めとして、家族の誰であれ、また、病気、介護、身体障害、その他、どのような場合でも、基本的には、すべて同じことになるかと思う。つまり、家族の場合には、その人の「姿・形（すがたかたち）」がどのように変化していこうとも、そういうこととはあまり関係なく、それ以前とそれほど大きく変わることなく、最後まで一緒に生きる（或いは面倒を見る）というような気持ちを持ち続けることになるかと思う。

二、他人の目

さて、問題は、他人の「自分を見る目」であるが、他人の「自分を見る目」というのは、自分の「姿・形（すがたかたち）」の変化とともに、他人の「自分を見る目」も変化しやすいということである。それは、いったい何を意味しているのかと言えば、それは、次のようなことである。

――つまり、われわれ人間というのは、どうしてもその人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形（すがたかたち）」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めて見ているところがあるということである。それでは、なぜそのような見方をするのだろうか。それは、他人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形（すがたかたち）」やその人の表面的な「言動」）などは、われわれの五感（つまり見たり聞いたりすること）を通して、それなりにはっきりととらえることができやすいからであり、一方、他人の「頭の中」（或いは「心の中」）が、いったいどういうふうになっているかなどは、誰にも分かりようがないからである。

つまり、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）には、その人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などが深く眠っているとともに、その「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが自然と生み出されては、その人というものをまさに形成（形づくって）いるということである。一方、われわれ人間というのは、他人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などのすべてを知りようもないので、その一人一人の他人の「頭の中」（或いは「心の中」）が、いったいどういうふうになっているかなどは、誰にも分かりようのない、まさに「ブラックボックス」状態であり、そ

れゆえ、その人が、何を思い、何を考えているかなどは、厳密にはなにひとつ分からないということである。

ところが、われわれ人間というのは、その人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形（すがたかたち）」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているところがあるということである。そして、そのような傾向がはっきりとあるからこそ、われわれ人間というのは、どうしても「外的事実」というものを、より重視するようになるとともに、結局は、それによって、自分というものを少しでもよく見せようとすることにもなるわけだ。それでは、いわゆる「外的事実」とは、具体的には、いったいどういうものになるのかと問えば、それは、次のようなものになるということである。

つまり、「外的事実」というのは、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）などをはじめ、外に現われる様々な言動、例えば、仕事、生活、趣味、娯楽、遊び、その他等で、その時々に表れる、その人の「顔の表情、しぐさ、言葉や行動、その他」、それらに加えて、その人の「生い立ち、年齢、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」等である。

一方、「内的事実」というのは、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）に生じて来る様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などであるが、それを大きく三つに分けてみると、一つは、「表面的部分」として、その時々に生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、一つは、「中間的部分」として、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などがあり、そして、もう一つは、「深層的部分」として、今日まで生きてきたその「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などの膨大な量の蓄積（蓄え）と遺伝子等があるかと思う。

さて、われわれ人間というのは、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ているのであり、その人の「内的事実」が、いったいどういうものであるかは、よく分からないものである。それゆえ、われわれ人間は、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ては、それをもとにして、その人に関してあれこれ判断し、評価しているということである。

一方、その人自身というのは、逆に、その人の「内的事実」を生きているということである。それゆえ、「外的事実」と「内的事実」との間には、当然のことながら、多かれ少なかれ、ズレがあるということである。

それでは、われわれ人間が、その人をほんとうに理解するためには、いったいどうしたらよいかと言えば、それは、大きな川を「下流から中流、中流から上流、そして、上流から源泉へと遡（さかのぼ）るようにすることである」が、それは、次のようになるかと思う。

まず最初は、その人の外に表れる様々な「外的事実」を、できるだけ厳密に「観察」（分析）することであるが、もちろん、それだけでは、不十分であり、それらを手かがりとして、今度は、その人の「心の中」に深く溶け入っては、自らその人となって、その人の「内的世界」を徹底的に生きてみることによってこそ、その人の「内的世界」の「表面的部分から中間的部分、中間的部分から深層的部分、そして、深層的部分から最も深奥にあるであろう『中心核』そのもの」へと理解を深めていくということである。

そして、その最も深奥にある「中心核」そのものこそは、まさにその人をその人たらしめている「精神的源泉」であり、その「精神的源泉」からこそ、その人なりの「思いや考え」などが絶えず生じて来るとともに、その人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、

また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」なども形成される、まさに「源泉」そのものになるということである。

三、あるがままの人間

さて、われわれ生身の人間というのは、本来、「良い面も悪い面もその他ありとあらゆる面」を同時に（潜在的に）持ち合わせているものであり、それゆえ、その人の置かれたその時々の状況に応じて、その人の「よい面」が現われたり、逆に、「悪い面」が現われたり、或いは、何かわけのわからない面が現われたりするということである、つまり、よい人は、いつも「よい人」であり、そして、悪い人は、いつも「悪い人」というようなことではなく、その人の置かれたその時々の状況に応じて、その人の「よい面」が現われたり、また、逆に、その人の「悪い面」が現われたり、あるいは、何かとんでもない面が現われたりするということである。

つまり、あるがままの「生身の人間」というのは、自分でも自分がいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまったく分からないものである。このことは、徹底的に考えてみる必要があり、われわれは、どうしてもあの人は、ああいう人、自分はこういう人間と考えやすいものであるが、しかし、そういう固定化した存在では決してなく、むしろいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまったく分からない、そういうまさにどろどろとした得体の知れない存在なのである。

例えば、社会的な地位もあり、また、思慮分別もあると思われていた人が、何か飛んでもないことをすると、われわれは、一応に驚いたりするが、しかし、その人がどういう職業に就いているからとか、ふだんは、こういう人だからということで、その人間を推し測ることはできないのである。というのも、われわれ生身の人間の「心の中」で蠢いている実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、そのまま外に現われるのではなく、それらは、その人の「知性や理性」などで自然とコントロールされた形で、外に現われてくるものだからである。

それゆえ、外に現われ出た「言動」だけを見て、あの人は、ああいう人と断定するわけにもいかないのである。――つまり、われわれ生身の人間の「心の中」には実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、絶えず現われたり、消えたりしている状態であるが、しかし、それらは、その人の「知性や理性」などで自然とコントロールされている状態であり、それゆえ、もしその人の「知性や理性」などのコントロールが弱まった時には、（例えば、酒などを大量に飲んで、その人の「知性や理性」などのコントロールが弱まった時には）、実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、そのまま外に現われやすくなるということである。

それでは、どちらがほんとうのその人なのか？　つまり、知性や理性などでコントロールされている「社会的自我」の時なのか？　それともコントロールが弱まり、様々な「欲望や感情」その他などに振りまわされている「利己的自我」の時なのか？　恐らく、それらに自分でも全く自覚できない「無意識の世界」などを加えたものが、まさに「その人」ということになるのだろう。

四、変身（表面的現象）

ところで、自分の「体」が、悪い方向ではなく、むしろ、良い方向へと「変身」するという場合もあるかと思う。例えば、有名な『みにくいアヒルの子』などは、まさにそのような童話であるが、その場合、みにくいアヒルの子は、その「姿・形（すがたかたち）」が、ほかの子供たちとは違っていたので、いろいろといじめられたりするわけだが、やがて、成長すると、いわゆる「白鳥の姿」へと大変身するという内容になっているかと思う。それは、いったいどういうことかと言えば、それをアヒルから人間の場合に置き換えて考えてみると、その人の「心」が「変心（変わった）」わけではなく、その人の「体」が「変身（変わった）」だけであるが、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）などが、良い方向へと「変身（変わった）」だけでも、他人の「その人を見る目」が、大きく変化しやすいということである。つまり、その人の「心」そのものは、何も変わっていなくても、その人の「体」（つまり「姿・形（すがたかたち）」）が、良い方向へと「変身（変わった）」だけでも、他人の「その人を見る目」が、大きく変化しやすいということである。

つまり、「体」の「変身」は、その人の「見た目」、つまり、その人の「身体的特徴」（つまり「容姿・容貌」）の「変身」であり、そして、その人の「見た目」の「変身」というのは、われわれの「五感」ではっきりととらえることができ得るものであるのに対して、一方の、その人の「心」の「変心」のほうは、われわれの「五感」ではなかなかとらえにくいものであり、それゆえ、せいぜい「表面的特徴」（その時々に生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」）などを知る程度であり、もっと奥にある「中間的部分」や「深層的部分」などは、本人が、うそ偽りなく、正直に告白しない限りは、なかなかとらえにくいものになるということである。

つまり、われわれ人間というのは、どうしても「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形（すがたかたち）」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているようなところがあるが、しかし、そのような「表面的な現象」（つまり「見た目の感じ」）というのは、いわば「仮相」であり、「実相」そのものであるかどうかはよく分からず、それゆえ、物事の「仮相」ではない、もっと奥にある「実相」そのもの（つまり「真の姿（すがた）」）をとらえることが、何よりも大事なことになるが、それを実際に行なっているのが、まさに「思惟活動」（つまり「思考（思索）活動」）の一つの「大きな目的」でもなるわけだ。――つまり、言葉を換えれば、われわれ人間の「目」によってとらえられるものは、物事の「表面的な現象」に過ぎず、それは、絶えず変化して止（とど）まることのないものであり、それゆえ、まさに「仮相」（つまり「仮の姿（すがた）」）であるが、その「表面的な現象」のもっと奥にある物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを厳密にとらえることが、すなわち、「実相」（つまり「真の姿（すがた）」）をとらえるということであるとともに、それには、当然のことながら、それぞれ「個人差」があり、そして、真に「内的成長（成熟）」した「心の眼」によってこそ、初めて、どこまでも厳密にとらえることができ得るようになるということである。

一方、そうではない人たちというのは、どうしても「表面的な現象」などに意味なく振りまわされてしまい、もっと奥にある、いわゆる物事の「実相」（つまり「真の姿（すがた）」）をとらえるということは、なかなかできにくいとともに、その「表面的な現象」（つまりそ

の人の表面的な「姿・形（すがたかたち）」やその人の表面的な「言動」などを見聞きしては、それをそのまま「真の姿（すがた）」（つまり「真実・真理」）だと思い込みやすいということである。

五、カフカの「変身」

ところで、カフカの『変身』という作品は、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していたという「内容」になるが、それは、例えば、今、世界中に蔓延している若者たちの、いわゆる「引きこもり現象」（自分の部屋の中に閉じ籠もって、外に出てこない、或いは外に出られないという「心理的状態」）を、まさに「象徴」的に表現していることにも、あるいはなるのかも知れない。――つまり、今までは何とか「社会」（俗世間）のなかで、活発に生きていた人が、現実の様々な「人間関係」の「あつれき」（摩擦）のなかで、実に様々に「傷つき、疲れ果て」て、次第に「心の活力や活気」などを失い、やがては、学校に行きたくても行けないような「登校拒否」、また、会社に行きたくても行けないような「出社拒否」、或いはまた、「社会」（人混み）のなかに出て行きたくても、出て行けないというような、そういう人間に「変身」してしまうという、まさに「引きこもり現象」（それは自分の「心の中」に閉じ籠もってしまうという現象）を、あるいは「象徴」的に表現していることになるのかも知れない。

もちろん、カフカの「変身」というのは、その人の「姿」が変わるのであり、それゆえ、いわゆる「心」が変わるというのではない。しかし、例えば、「体」が悪い方向へと変化するということは、その人の「心」もそのような方向へと変化しやすく、また、「心」が深く「悩み苦しむ」ようになれば、その人の「体」もそのような方向へと変化しやすくなるということで、それゆえ、われわれ人間の「体」と「心」というのは、決して「別々のもの」ではなく、むしろ、極めて「親密な関係」にあるということである。例えば、「体」が悪化したために、「外」に出られなくなるのと、「心」が悪化したために、「外」に出られなくなるのとでは、もちろん、最初の「動機」は違うとしても、しかし、長い間、独り「部屋」の中に閉じ籠もって、外にはあまり出なくなるような状態が長く続けば、やがては、ほとんど同じような「心理的状態」を生み出すことになるかと思う。それは、いったいどういうものかと問えば、それは、部屋の中にいる間は、その人は、「精神の安定や安心」などが得られているとともに、何か好きなことを行なっている時には、その人なりの「満足感や充実感」などを得ることもでき得る。しかし、「外」に出て行くのには、やはり不安がよぎり、人と会うのも、また、人と面と向かって話をするのも不安を感じてしまう。それは、なぜかと問えば、それは、結局、――自分が何らかの意味で「傷つく」ことになるのが不安（嫌）だし、また、他人を何らかの意味で「傷つけてしまう」ことになるのも、そのどちらも「嫌だ」という「心理」にどこか似ているということである。

一方、その人を取りまく「家族関係」というものにも、大きな「問題」が生じることになるが、カフカの「作品」のなかでは、例えば、母親は、息子の姿を見て、いわゆる「失神」をしてしまうが、それは、まさに母親の「失望感」の表れでもあるとともに、父親は、そのような息子に対して、リンゴの実を投げつけ、それが背中にめり込むことになるが、それは、まさに父親の「怒り」の象徴でもあり、そして、妹は、最初のうちは、兄の面倒をせっせと見ることになるが、それでも、最後には見放してしまう。それは、結局は、ま

さに妹の「諦めの気持ち」の表れでもあるということである。そして、毒虫に「変身」してしまった主人公は、自分の「気持ち」（真意）を家族に正確に伝えることもできず、（それは、虫の状態なので、言葉による「意思疎通」もうまくいかず）、結局は、お互い親しく話し合って「理解し合う」ということもできずに、主人公は、まさに孤独なまま「食事も摂らなくなり、死んでしまう」ということである。

六、対応の仕方

それでは、そのような場合、いったいどうしたらよいのかと問えば、それは、結局、段階を踏まえて「外」に出るしかない。もちろん、「外」に出れば、実に様々なことで「傷つく」ことになるだろうし、また、他人を「傷つけてしまう」こともあるかも知れない。しかし、それが、まさに「生きる」ということだと覚悟を決めて、「外」に出るしかない。そうすれば、自分が「傷つく」こともあるだろうが、また、「楽しい」こともあるかも知れない。また、人との交流をはじめ、様々な「助言や援助」その他などが得られることもあるかも知れない。そのようなところから、自分の「生きる場所」を見つけ出していくということである。――ただ、若い人たちのなかには、例えば、「生活保護」などの受給を受けて、それに甘んじて長々と「ぬるま湯」につかってしまう人も多いかと思うが、その場合、それが短期であれば、それほど問題はないだろうが、それが長期に渡るということであれば、それは、真に自分を「生かす道」ではなく、むしろ、自分を「殺すような道」であり、自分の「可能性」（潜在能力）を自ら放棄してしまうものである。というのも、それは、どのような分野のどのようなことであれ、いわゆる「努力」を積み重ねることによってこそ、初めて、その人の「可能性」（潜在能力）も引き出されて来るものであるとともに、その人の「人生（道）も、初めて開ける」ものであり、いわゆる「努力」を積み重ねることを怠って、長々と「ぬるま湯」につかっているだけでは、その人の「人生（道）は、永遠に開けない」ということである。それゆえ、何よりも大事なことは、どのような分野のどのようなことであれ、いわゆる「努力」を何年も積み重ねることであり、そのような「努力」を何年も積み重ねていくうちに、やがては「自分の人生（道）も、開けることになる」とともに、いわゆる自分が「心の中」に想い描くような、まさに「自分本来の人生」へと近づけていくことも、可能になるということである。

＊　＊

人間の基本的な欲求

人間の基本的な欲求

例えば、われわれ人間の「基本的な欲求」というのは、すべての人間に共通したものであり、それゆえ、基本的には何も変わるところはないのである。それでは、一体、どこがどのように違うのかと問えば、それは、それぞれの「基本的な欲求」にどれだけこだわっているのか？　それが人によってそれぞれ違って来るだけである。――例えば、食事であれば、空腹を満たさなければ、やがては死んでしまうものであり、それゆえ、何かを食べなければならないが、その場合、空腹が満たされれば、それでもう十分という場合と、あとは、その「食べ物」というものにどこまでこだわるのかという、そういう「問題」が残されているだけである。つまり、下は、生きるための必要最少限度の「食事」から、上は、世界中のありとあらゆる「料理」を食べ尽くそうという領域までのなかで、「自分は、一体、どこに位置するのか？」という、そういうことが、一人一人違うというだけである。

また、「性欲」（それは「愛情欲」「セックス欲」「子孫欲」）などにしても、人間であれば、誰もが本来持ち合わせている「基本的な欲求」であり、それゆえ、あとは、その人が「性欲」（それは「愛情欲」「セックス欲」「子孫欲」）というものにどこまでこだわっているのか？　それによって、その人の「異性との関係」（或いは「同性との関係」）も、それぞれ「違って来る」ということである。――例えば、どうしても「子供がほしい」と思えば、人工授精でも、養子でも、ほしいということになるだろうし、また、「愛情問題」についても、誰々が好きだという場合、どこまで好きなのか？　どこまでのこだわりを持っているのか？　誰にどこまでの「愛情」を求め、また、誰にどこまでの「愛情」を降り注ぎたいのか？　そして、「セックス」に対しても、下は、全く興味を示さない（或いは拒絶反応を示す）ような場合から、上は、できるだけ世界中のありとあらゆる異性（或いは「同性」）とありとあらゆるセックスをしてみたいという領域までのなかで、「自分は、一体、どこに位置するのか？」という、そういうことが、一人一人違うというだけである。

そして、「物欲」（金銭欲）にしても、基本的には、誰もが持ち合わせている「基本的な欲求」であり、あとは、どういうものにどこまだこだわっているのか？　そういう「問題」があるだけであり、例えば、下は、生活するのに必要最小限度の「物欲」（金銭欲）だけで十分とする場合と、上は、この世にあるありとあらゆるもののありとあらゆるものをできるだけ何でも手に入れたいという「物欲」（金銭欲）の領域までのなかで、「自分は、一体、どこに位置するのか？」という、そういうことが、一人一人違うというだけである。

それでは、これらは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、われわれ人間の「基本的な欲求」というのは、すべての人間に共通したものであり、それゆえ、基本的には何も変わるところはなく、この地点までは、人間というのは、すべて「同じ」であるということである。それでは、一体、どこからどのように違うのかと問えば、それは、それぞれの「基本的な欲求」の最低限までは全く同じであるが、そのあとは、例えば、「食欲、性欲、物欲、金銭欲、所有欲、独占欲、支配欲、出世（社会的地位）欲、名誉欲、名声欲、その他」、実に様々なものがあるかと思うが、それらにどこまでこだわっているのか？　それぞれの「欲求」に対するこだわりの「強弱」こそは、まさに「自分は、一体、どこに位置するのか？」ということの「位置付け」であり、そういうことが、一人一人違うというだけに過ぎないのである。――それをもっと簡単に言えば、人間というのは、基本的には、

みな「同じ」であり、あとは、何にこだわっているのか？　そこが「違う」だけである。

＊　＊

最後に辿りつく地点

最後に辿りつく地点

例えば、世界中のありとあらゆる「料理」を食べ尽くした人が、最後に辿りつく地点とは、一体、どのような地点かと問えば、それは、結局、「……お茶漬けやにぎり飯などでもう十分」ということになるのだろう。それは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、結局、人間、生きていく上で、何もことさらに「美味しい料理」である必要もなく、ごく一般的に、美味しい「料理」であれば、それでもう十分ということである。

また、例えば、世界中のありとあらゆる「国々」を旅し尽くした人が、最後に辿りつく地点とは、一体、どのような地点かと問えば、それは、結局、「……わが家がいちばん」ということになるのだろう。それは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、結局、われわれ人間にとって、最も「安心できる所」、最も「心が安らぐ所」、そして、最も「心の落ち着く所」、それは、結局、「わが家」であるということである。

また、例えば、世界中のありとあらゆる「女性たち」と恋愛をし尽くした人が、最後に辿りつく地点とは、一体、どのような地点かと問えば、それは、結局、「……同じ事の繰り返しに過ぎず、身も心を真に深く溶け合える相手こそは、まさに理想である」ということになるのだろう。――また、例えば、世界中にある眼も眩むばかりの「衣装や品物或いは豪邸」などを手に入れて、そこに住み、それらで身を華やかに飾り立てても、それらは、すべて「自分の外に存在するものであり、それゆえ、それらによって、まさに自分自身が真に「優れた存在」になるわけではなく、また、「社会的地位や名誉或いは又名声」なども、結局は、みな同じことであり、それらは、すべて「社会的な衣装」に過ぎず、それらの「社会的な衣装」がどれほど豪華な「社会的な衣装」であろうとも、それらを身に纏っているその人「自身」と、その豪華な「社会的な衣装」とは、もともと「別々のもの」であり、それゆえ、それらの様々な「社会的な衣装」などをすべて脱ぎ捨てても、なお、その人「自身」が、どれだけ人間として真に魅力的に「内的成長（成熟）」しているのかが、まさにその人の人間としての真の「評価」になるのである。

＊　　＊

「参考文献」

※ 底本「変身他一篇」（カフカ作・山下肇訳）（「岩波文庫」）